

2017/10/22

「永遠の契約」

■神が立てた契約とは

「わたしはあなたがたと契約を立てる。すべて肉なるものは、もはや大洪水の水では断ち切られない。もはや大洪水が地を滅ぼすようなことはない。」（創世記 9:11）

「虹が雲の中にあるとき、わたしはそれを見て、神と、すべての生き物、地上のすべて肉なるものとの間の永遠の契約を思い出そう。」（創世記 9:16）

神様は一度大洪水によって、この地上の生き物を滅ぼしましたが、その後、「私はもう二度と人を滅ぼすことはしない」と、ノアに語りました。これが、神が立てた永遠の契約です。しかし、人はもともと罪によって滅ぶ存在です。ですから、それを滅ぼさないということは、救い出すことを意味します。イエス・キリストご自身も、「わたしは、世をさばくためではなく救うために来た」と語っておられます。

契約は、通常、「立てる」とは言わず、「結ぶ」という言い方をするものです。「契約を結ぶ」とは、双方に負うべき義務があるのですが、神様は、いっさい人に義務を負わせることなく、ご自分にだけ義務を課したため、「契約を結ぶ」のではなく、「契約を立てる」と言っておられます。

神様はアブラハムに対して、契約の具体的な内容を次のように語りました。

「わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、そしてあなたの後のあなたの子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしがあなたの神、あなたの後の子孫の神となるためである。わたしは、あなたが滞在している地、すなわちカナンの全土を、あなたとあなたの後のあなたの子孫に永遠の所有として与える。わたしは、彼らの神となる。」（創世記 17:7-8）

神様がアブラハムに教えてくださった契約の具体的な内容は二つあり、これは、今の私達にとって、次のような意味があります。

1. 私があなたの神となるという契約

神との結びつきを失ってから、人間は、死の世界に生きるようになり、そこで頼るものは、金や名誉や富といったものでした。「神様があなたの神となる」とは、神様ご自身が、あなたとの関係を回復し、あなたを救うという約束です。永遠のいのちを回復し、天国に行って永遠に生きることができるという契約を、神様は立ててくださいました。

2. カナンの全土をあなたの所有とする

カナンは安息を指す霊的な言葉です。つまり、神様は、あなたが安息を所有する契約を立ててくださったのです。このことは、聖書全体を通して語られており、エレミヤ書では「神の計画は、あなたがたが平安を持つ計画だ。」と語られ、ヘブル書では「神の安息に入る。」と語られています。

神の安息とは、神を信頼し、神を愛することで手にする平安のことです。イエス・キリストは、「私がおなたに与える平安は、この世のものとは違う。」と言って、それは、富や名誉による一時的な安心ではなく、神がおなたと一緒に生きることだと教えています。神との信頼関係を築くことで、私達には安息が生じるのです。

つまり、神の契約とは、神様と関係を回復し、それをさらに豊かにすることによって、友と呼ばれる信頼関係を築き上げるという契約です。その結果、人はまことの平安を得ることができるのです。

■信仰の義と行いの義

「そして、「アブラハムは神を信じ、その信仰が彼の義とみなされた。」という聖書のことが実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。」(ヤコブ 2:23)

アブラハムは、神を信じる信仰によって、義とされました。信仰とは、神の恵みを受け取る運動のことです。神の恵みを受け取ることで、神との関係が回復します。イエス様は、神の恵みを、雨や太陽の光にたとえました。信じるとは、それをただ受け取ることです。ただそれだけで、人は救われます。立派な行いは必要ありません。「アブラハムは神を信じ、その信仰によって義とされた」とは、信じた時に、第1の契約である救いが達成されたということです。

そして、彼はさらに「神の友」と呼ばれる信頼関係を手にし、第2の契約である「安息」を得ます。それは、アブラハムが神の言葉を信頼して、息子イサクを捧げたことによります。

「私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげたとき、行ないによって義と認められたではありませんか。」(ヤコブ 2:21)

アブラハムは、神を信頼してイサクを捧げた時、行いによって義と認められたとあります。アブラハムは、すでに信仰によって義と認められていますが、聖書が教える義はもう一つあるということがわかります。それが、神の言葉を信頼して得られる平安のことであり、聖書はそれを行いによる義と呼んでいます。つまり、聖書が教える義は二つあり、一つ目は、神との関係が回復した時に与えられる救いの義であり、二つ目は、神を信頼できるようになった時に与えられる行いの義です。神の義は、義から義へと進みます。イエス様のことを、信仰の創始者であり、完成者と呼びますが、それは、二つの義が両方とも信仰で手にするもの

だからです。「義人は信仰によって生きる」と聖書にあります。信仰に始まり、信仰に生き、ますます神を信頼できるようになるのが、信仰による義人の生き方なのです。

「人は行ないによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではないことがわかるでしょう。」(ヤコブ 2:24)

平安・安息という義の実を結ぶ行いとは、うわべの良い行いのことではなく、信仰によって一步を踏み出すことです。ただ信じる信仰だけで、天国に行くことのできる永遠のいのちの救いを手にすることができますし、この救いが取り去られることはありません。しかし、平安・安息という義を得るには、神を信じて一步を踏み出すという行いによって信頼を増し加えることで育てるしかないのです。そして、神様は、ただ永遠のいのちを得るだけでなく、安息を手にしてほしいと願っておられますから、救われた者が次に目指す生き方は、安息を手にする生き方です。

■信頼関係を築くには

どうすれば、神から友と呼ばれるような信頼関係を築くことができるのでしょうか。

まず、神様と信頼関係を築く上で重要な点は、神様は、私達のことをすでに 100%信頼しておられるということです。聖書が教える信頼とは、愛です。神様は、罪人である私達のために十字架に架かって死ぬほどに、私達を愛しておられます。つまり、神様は、すでに一方的に私達を信頼し、愛してくださっているのです。神様は、決して私達の行いを見て信頼するわけではありません。

「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」(ローマ 5:8)

ですから、神との信頼関係を築くとは、私達の側が神を信頼できるようになることです。そのためには、私達には神の恵みを受け取る勇気が必要になります。「本当に信じるだけで大丈夫なのだろうか」等、様々な不安に打ち勝ち、信仰とは、勇気を成長させていく道でもあります。どのような勇気を必要とするのか、考えてみましょう。

1. 神の命令を守る勇気

「神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。」

(I ヨハネ 5:3)

「神の命令とは、私たちが御子イエス・キリストの御名を信じ、キリストが命じられたとおりに、私たちが互いに愛し合うことです。」(I ヨハネ 3:23)

神を信頼するために必要なことの第一は、神の命令を守ることです。それは、「愛しなさい」

という一言に集約されます。

「互いに愛し合え」「隣人を愛せよ」「兄弟を愛せよ」「あなたの敵を愛せよ」…と、聖書は教えています。しかし、嫌だと思う人、腹を立てている人を愛すること、親切にすることは、非常に難しいことです。自分に良くしてくれない人を愛するには、御言葉を実行しよう、神の命令を守ろうという勇気が必要です。

2. 絶望する勇気

神の命令に従って人を愛そうとすると、私達はすぐに「自分には愛せない」という現実を突きつけられます。勇気をもって一步を踏み出したのに、すぐに壁にぶつかってしまうのです。この事実を認められるかどうか重要です。つまり、神の命令に従う勇気の次に必要なのは、愛そうと思っても愛することができない惨めな自分を受け入れる勇気です。

「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。」（ローマ 7:15）

「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」（ローマ 7:24）

パウロは、善を行ないたいと願ってもできない自分に気づきました。そして、自分は罪人であって、自分の力ではどうにもできないという絶望を受け止めたのです。このことによって、彼は、闇の中に輝く光を見つけ出しました。つまり、絶望することによって神の恵みが見えるようになり、パウロは、おぼれる者がわらをもつかむように、神の恵みにしがみつきました。

ところが、多くの人は、絶望と向き合おうとはしません。現実から目を背け、楽しいことに目を向けて罪を考えないようにしたり、言い訳をしたり同情を求めたり、あるいは、愛していると思い込んだりして、愛せないという事実を受け入れようとしないのです。しかし、自分の罪と向き合うことをせず、絶望から逃げてしまったら、神の恵みに気がつくことも、それに飛びつくこともないでしょう。自分はみじめだということを受け止めることによって、希望が見えるようになるのです。

3. 罪が赦される恵みを受け止める勇気(こんな自分でも愛されていることを受容する勇気)

なぜ罪が赦されると受け入れることに、勇気が必要なのでしょう。それは、こんな自分は愛されないと思い込んでいるからです。

私達は、物心ついた時から、人に受け入れてもらうために、愛されようとして必死に努力してきました。その結果、ありのままの自分では愛されないという思いがしみこんでいます。ですから、無条件で愛されると言われても受け入れることができず、こんなダメな自

分は愛されるはずがないと言って、神の恵みを拒んでしまうのです。

「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」(Iヨハネ 1:9)

すべての問題の解決は、無条件で愛する神の恵みを受け取ることです。しかし、これを受け取るには、絶望する勇気が必要です。聖書に登場する人々がいつ変わったのか、ヤコブ・アブラハム・パウロ・ペテロ……、皆、自分の罪深さに気づき、絶望した時です。

聖書が幸いであると言っている「心の貧しい人」とは、絶望する人のことです。その時、「こんな私が愛されている。」という神の恵みを受け取ることができたら、悪はきよめられ、神を愛し、人を愛せるようになるのです。

「だから、わたしは『この女の多くの罪は赦されている』と言います。それは彼女がよい愛したからです。しかし少ししか赦されない者は、少ししか愛しません。」(ルカ 7:47)

多くの罪が赦された体験をする人は、多く愛することができるようになります。ですから、神の前に多くの罪が赦される経験をした人は幸いです。自分がどうにもならない罪人であることを認め、絶望し、それでもなお愛し赦してくださる神の恵みを受け取るならば、私達は、神を愛し、人を愛せるようになります。こうして、平安を手にすることができるようになるのです。

これが、神が用意した安息につながる恵みです。

神の福音は、神を知って終わるものではなく、平安を手にするものです。そのために必要なことは、絶望です。一度絶望を体験すれば、神の恵みを離すことはなく、恵みを受け取り続けられるようになります。こんな自分でも愛されていると知ることが、生きる勇気になります。患難・災いにぶつかり、自分に絶望する時こそ、神の恵みを受け取るチャンスだ、そういう希望を持って生きましょう。